



膵癌診療ポケットガイド

奥坂拓志, 羽鳥 隆 ● 編

膵癌診療のオールラウンダー

評者

小松 嘉人

北大病院腫瘍センター副センター長／化学療法部部長

『膵癌診療ポケットガイド』という書籍が、編集部から送られてきた。読んで書評をとの依頼であった。膵癌マニュアルとか、膵癌～～というのはちまたにたくさんあるので、また同様のものであろうと思いながら読ませていただいたところ、そうではなかった。ポケットガイドなどという題名のため、広く浅くの内容を想像していたが、これも間違いであった。学生や、研修医向けの初心者向きの記載が多いのかと予測していたが、まったく異なるものであった。

さすが、国立がんセンター中央病院・肝胆膵内科医長の奥坂先生と東京女子医科大学消化器外科講師の羽鳥先生というわが国の膵癌診療をリードするおふたりが編者としてまとめただけあって、すでに経験のある先生方にとっても大変有用な書となることは間違いないものと思われる。現場での、今日の臨床に必要でかつ正確な情報を外科から内科的治療に至るまで網羅的に記載されており、忙しい臨床現場での医療スタッフがこれをポケットに入れて膵癌という困難な敵に戦いを挑むには最適の本といえるのではないだろうか。まさに実践向きのマニュアル本である。

このポケットガイドは、今日新患として目の前に進行がん患者さんがいらした際に、診察室の机の上に1冊あれば、すべてこと足り内容となっている。まずは、最新の統計を用いた疫学情報や診断について詳しく書かれているため、患者さんおよびご家族への説明が十分かつ容易になるものと思われる。その後も、治療に至るまでの画像診断から細かな生検のこつなどが記載され、かつ診断のプロチャートま

で書かれているので、その通りに実施するだけで治療方針も明確になるものと思われる。内科、外科両方の編者がいるため、外科的治療も内科的治療もかなり詳細な説明がなされており、外科医、内科医いづれにとっても最新の治療が大変わかりやすく解説されている。膵癌といえば、“早期発見と手術しかない！”とのことで、抗がん剤治療の項は、お情け程度に1～2ページついているというものが多いと思うが、本書では、少ないながらも繰り広げられてきた各種臨床試験とそのEBMを網羅的にレビューし、標準治療から、分子標的やその他の新薬を用いた試験的治療などまでを、標準療法と区別しながら詳細に説明してくれており、ポケット本とは思えない内容となっている。また、膵癌ならではの、積極的治療が不能となったのちの支持療法から、がん疼痛治療、緩和医療術に至るまでもしっかりと解説されている。さらに本書特有の素晴らしい点としては、医師だけでなく、薬剤師、看護師、ソーシャルワーカーなどチーム医療を担うメンバーの執筆もあるため、疼痛緩和から患者さんの心のケア、膵癌教室や患者会(PanCAN)のことまでが書かれている。医師だけでなくすべてのメディカルスタッフ必携の膵癌診療のオールラウンダー書といえるのではないだろうか。

● B 6 変型 頁 320 2010 年

定価 5,250 円(本体 5,000 円+税 5%)

[ISBN 978-4-260-00951-5] 医学書院刊